

特集●日本の食を守れるか？

中国産冷凍餃子事件における行政の対応を検証する

① 保健所の対応と全国保健所長会の取り組み——島根県県央保健所 岸本 泰子

② 自治体の対応—東京都の場合を中心に——東京都福祉保健局 櫻山 豊夫・富樫 哲也, 他

③ 国の対応——厚生労働省医薬食品局食品安全部監視安全課 道野 英司

食品安全行政と必要な専門知識——農林水産省消費安全局 山田友紀子

中国における食品安全管理体制——(株)アジア食品安全研究センター 佐藤 元昭

日本の食料自給率はなぜ低いのか

① 世界の食糧需給の社会的背景——順天堂大学公衆衛生学 丸井 英二

② わが国の食糧自給率の推移と農業政策——総務省行政管理局管理官 松原 明紀

わが国の農業政策の推移と地域社会の変貌——大阪大学大学院医学系研究科 高鳥毛敏雄

わが国の食を育て、その安全を守るために——大阪大学コミュニケーションデザインセンター 平川 秀幸

●視点

社会の変化に応える公衆衛生とは——信州大学医学部衛生学公衆衛生学教授 野見山哲生

あ と が き

食は人間の基本的な営みであり、今でも衣食住の中の中心の営みである。食物はもともと自らが生産するか、身近な生活圏内で確保してきたものである。しかし現在は、見知らぬ地域、見知らぬ人々が生産するものとなっている。食料生産は産業となり、ビジネスであり、企業活動として行うものとなっている。ビジネスであるから経済性、効率性が強く求められるのは当然なのであろう。生産者と消費者との距離が広がり、生産者にも消費者にも接することのない中間者が増え、農産物や食品の価格は市場が決定する状況になっている。生産者が消費者のニーズに基づいてコミュニケーションして農産物を流通させることは難しい状況にある。

「食品」を「物」として扱うことが日常化したことが、事

業者が偽装に対する後ろめたさを感じにくくしてしまったのではないか。そうであれば、食品企業のコンプライアンス・マネジメント、企業倫理の向上、また消費者を保護するために企業や業者を取り締まる行政制度を強化していくのはやむを得ない流れなのであろう。

わが国の行政組織は欧米諸国と比較すると行政組織の中に専門職の人数が少なく、職業倫理の確立も十分とは言えない状況にある。藤田由紀子氏が指摘されている通りだと思う。「地・産・地・消」の、地が「地域」ではなく「地球」になってしまっている。この現状を見直していかねばならない状況に直面しているのではないかと、公衆衛生行政には問題がないのだろうか。

(高鳥毛敏雄)

公衆衛生(第72巻 第10号) 2008年10月15日発行(毎月1回15日発行)

定価 2,415 円(本体 2,300 円+税 5%) (2008 年々ぎめ予約購読料 28,200 円 ※配送料弊社負担)

発行: 株式会社 医学書院 代表者 金原 優

☎ 113-8719 東京都文京区本郷 1-28-23

本誌編集室直通 TEL (03) 3817-5718 FAX (03) 3815-7802

販売部直通 TEL (03) 3817-5659・5660 FAX (03) 3815-7804

E-mail: koshu@igaku-shoin.co.jp 振替口座 00170-9-96693 番

印刷所: 三美印刷(株) TEL (03) 3803-3131

広告申込所: (株) 東広社 TEL (03) 3409-8803/デザイン: デザイン・プレイス

・ Published by IGAKU-SHOIN Ltd., 1-28-23 Hongo, Bunkyo-ku, Tokyo

© 2008, Printed in Japan.

・ 本誌に掲載された著作物の複写・複製・転載・翻訳・データベースへの取り込みおよび送信(送信可能化権を含む)に関する許諾権は医学書院が保有しています。

・ **JCLIS** 《日本著作出版権管理システム委託出版物》

本誌の無断複写は著作権法上での例外を除き、禁じられています。複写される場合は、そのつど事前に《日本著作出版権管理システム (03-3817-5670)》の許諾を得てください。

・ 医学書院ホームページ <http://www.igaku-shoin.co.jp>

・ 公衆衛生 URL <http://www.igaku-shoin.co.jp/mag/koshu/>

編集顧問

多田 羅浩三 大阪大学名誉教授・放送大学教授

林 謙治 国立保健医療科学院

編集委員 (50 音順)

阿彦 忠之 山形県健康福祉部・衛生研究所

品川 靖子 東京都文京区文京保健所

高鳥毛敏雄 大阪大学大学院医学系研究科

西田 茂樹 福島県衛生研究所

編集室通信

自らを元にして作り出すもの(もしくはサービス)は、本当に社会に役立つ誇れるものかどうか。心がこめられて作られているかどうか。そしてユーザーに対して、誠意と思いやりをきちんと持っているかどうか。これらが叶っているとき、信頼される製品(サービス)として、社会の人々に認識されるのだと思います。数々の食品偽装の問題は、ものの作り手の卑怯さ、強欲さ、汚さが全面に出て、信頼の気持ち裏切られたと感じてしまいました。しかし一方で、私たちの周りには、まだ依然として信頼できる製品(サービス)がしっかりとある。何が本物で何が偽物か、いま、私たちは真偽を見抜く眼を鍛えられているのかもしれません。「本物」しか残らない時代になりそうです。(野中)

(担当/野中・今田)